

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：碓陽子

碓陽子氏の論文「アメリカ社会における『ファット／肥満』概念構築の民族誌—リスクと社会運動からの人類学的探究」は、2006年から2009年までに行われた、アメリカ・カリフォルニア州でのフィールドワークに基づく民族誌である。本論文の主要目的は、「肥満」と呼ばれる人々、特に女性を対象として、外部からそう規定され、健康管理・保険行政の脈絡で問題化され、文化・社会的に構築されていく過程を跡づけながら、それに対して打ち立てられる、「ファット」としてのオルターナティブな生を、リスクや社会運動の観点から明らかにすることである。

本論文は、序章（「リスクと社会運動から理解する、アメリカ社会における「ファット／肥満」概念構築と人間存在の相互作用」）、第1部（「肥満・リスク・制度」）、第2部（「ファット・社会運動・科学」）、終章、参考文献から構成されている。

序章では主に、2つの領域で先行研究の整理と批判が行われる。1つは、太った身体の議論のされ方に関してで、人類学は身体の文化的多様性を指摘し、太った身体を肯定的に見る視座を相対主義的に確保したが、このことは身体観が文化として構築されるものという論を補強し、その結果、構築された結果としての身体という側面のみが強調されることになった。2つ目はリスク社会論に関することである。リスク認識は同時にそのリスク認識の基本構造を問う社会運動を生み出すが、太った身体をそれとして受け入れようとする運動は、アイデンティティ・ポリティクス論では理解できないなど、従来の社会運動論の枠組では分析が困難であることが述べられる。（なお、本論文では、構築された太った身体像を言うとき「肥満」、これに対してそれをそのまま受け入れ、リスク論の外部に立とうとする人々にとっての身体などを言うとき「ファット」と言及されている。）

第1部の第1章「集合のリアリティ・個のリアリティ」では、統計学的思考が人口に膾炙し、リスク論的認識が広がる歴史が概観され、集合的リスクが個人化していくプロセスが再確認される。

第2章「空転するカテゴリー」では、アメリカの公衆衛生政策の中で肥満がどう行政的課題とされ、貧困問題と関連づけられたのか、その流れが概観される。特に、貧困層においてリスクを引き受けることの困難が強調されている。

第2部は、本論文の基本的資料、ファット・アクセプタンス運動の軸となる団体、全米ファット・アクセプタンス協会でのフィールドデータに基づく民族誌的記述と議論の場である。第3章「ファット・アクセプタンス運動の展開にみる『ファット』カテゴリーの特殊性」においては、アメリカの種々の社会運動の歴史においてファット・アクセプタンス運動が辿

った歴史が整理され、その中で占めるファット・アクセプタンス運動史の特異性が指摘される。それは、〈ファット〉が、〈女〉や〈障害〉とも異なるという点に求められる。

続く第4章「ファット・アクセプタンス運動とフェミニズムの『ぎこちない関係』」では、その題名の通り、両者間に見られる「ぎこちない関係」が論究される。ファット・アクセプタンス運動の参加者の多くは女性であり、外部の押し付けられた視線を問い返すという点でフェミニズム運動と重なるように見えるが、リスク論的環境の中では自己管理できない人々という別の外部の視線が生じ、「ぎこちなさ」が生まれるという。

第5章「『ファット』であることを学ぶ」は、運動に参加しようとする女性達の動機が解明される。社会運動論では集合的アイデンティティーが運動成立のキー概念となることが多いが、ファット・アクセプタンス運動で顕著なのは、運動の現場で生成される情動的関係性であるとされる。

第6章「ファット・アクセプタンス運動による対抗的なく世界〉の制作」では、哲学者ネルソン・グッドマンの「世界制作」の概念に依拠しつつ、リスク社会論的環境に引き込まれているファットの人々が、それと同じ次元ではないところで対抗しようとしていると論じられる。その対抗は、並列的な対抗というよりは、異なる世界の制作であると主張される。

終章では、これまでの記述と分析が整理される。特に、リスク社会論では未来の不確実性が確率論的決定論を伴って意識される傾向にあるが、ファット・アクセプタンス運動では、異なる世界の制作を通じてそれらを乗り越えようとする事、同時にその乗り越えは、自己意識の不断の吟味が要請されそれゆえ困難なプロセスであることが結論づけられる。

本論文が有する学術上の貢献は主に以下の2点にまとめられる。第一に、貧困層における肥満問題とファット・アクセプタンス運動に関する緻密な質的調査によって、現代アメリカの肥満問題に関して重層的な民族誌的記述を行った点である。この脈絡で本論文自体が、リスク社会論を再考した貴重な営みにもなり得ている。第二に、ファットという現象に着目することで、リスク社会・社会運動・女性性・貧困といった諸領域を横断する議論の地平を打ち立てたことである。多様な理論的視点から複数の事例を検討し、そこから独自の人類学的考察を展開している好例といえよう。

しかしながら、幾つかの問題点が審査委員から指摘された。認識論的脈絡の「世界制作」の概念を本論文のような存在論的次元も含む対象に応用することの困難さ、採用する概念の根拠の不透明性（例えば「罪悪感」というファクターを深く検討すべきではないか）、リスク社会論を支える現代医学の「強さ」の過小評価、などである。

だが上記の問題点は、博士号請求論文としての本論文にとって大きな瑕疵とは言えず、本論文は、文化人類学への重要な貢献と判定された。

従って本審査委員会は、本論文提出者は博士（学術）の学位を授与するのにふさわしい者と、全員一致で認定する。